

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 生活文化史

<史料館だより>

### 目次

◇神戸市東灘区森北町所在の稲荷神社境内

石造遺物調査報告……………望月 浩 2

2000.3.31

NO.27



稲荷神社境内の水盤背面にある銘文の拓本  
 「魚屋」や「濱屋」など、当時漁業が盛んだった様子が偲ばれる。  
 文政5年(1822)奉納された。(本誌6P参照)

神戸深江生活文化史料館

## 神戸市東灘区森北町所在の

## 稲荷神社境内石造遺物調査報告

史料館学芸員 望月 浩

## 一、はじめに

史料館の所在する深江地区は、近世には本庄九ヶ所村と呼ばれる村々のひとつで、村内の大日靈女神社の他に、稲荷神社・保久良神社の氏子でもあった。明治以後は保久良神社からは氏子を離れるが、現在でも稲荷神社は、五月例祭を含め、地元の氏神として祀られている。そのため境内にも地元の人々が近世以降寄進した石造遺物が数多く見られる。村内に所在する大日靈女神社の境内の石造遺物は本誌二十号で紹介している。今回は稲荷神社境内の石造遺物の調査結果を報告していきたい。なお、本文中に掲載された写真の撮影と拓本の採拓は筆者自身が行なったものである。

## 二、森の稲荷神社

JR甲南山手駅より西北三百メートルの神戸市東灘区森北町四丁目十七に、稲荷神社が鎮座している。通称「森のお稲荷さん」と地元の人々に親しまれてきた。祭神は、宇迦御魂・豊受女命・稲耜魂命・健甕方命・応神天皇・大山祇神・菅原道真・八衢比古神。神社の起源には次のような社伝が残されている。靈龜元年（七二三）卯月卯日の夜に深江浦の海上に光が輝いた。村人はこれを怪しんで海辺に集まると、一基の神輿が波に乗って浜辺に向かってきた。そして、「私は稲荷の神である。この山手の森陰に祀れば村人を幸せに

守ろう」と言った。そこで村人たちは現在の地に祀るようになったといわれる。その後村人は、神様の漂着した卯月卯日を吉日として、卯の葉祭りと呼ばれる例祭を行なうようになった。また、江戸時代に書かれた『摂津名所図会』や『摂陽群談』には、深江の踊り松のあったところに、稲荷神社のご神体が流れつき、ちやうど村人たちが麦の刈り入れをしている時であったので、杵を手にしたままご神体を迎えに集まってその回りを踊ったと記述されている。そしてこの場



▲ 稲荷神社所在地図  
 (「国土地理院地形図 1/25,000西宮」を利用したものである)



稲荷神社拜殿



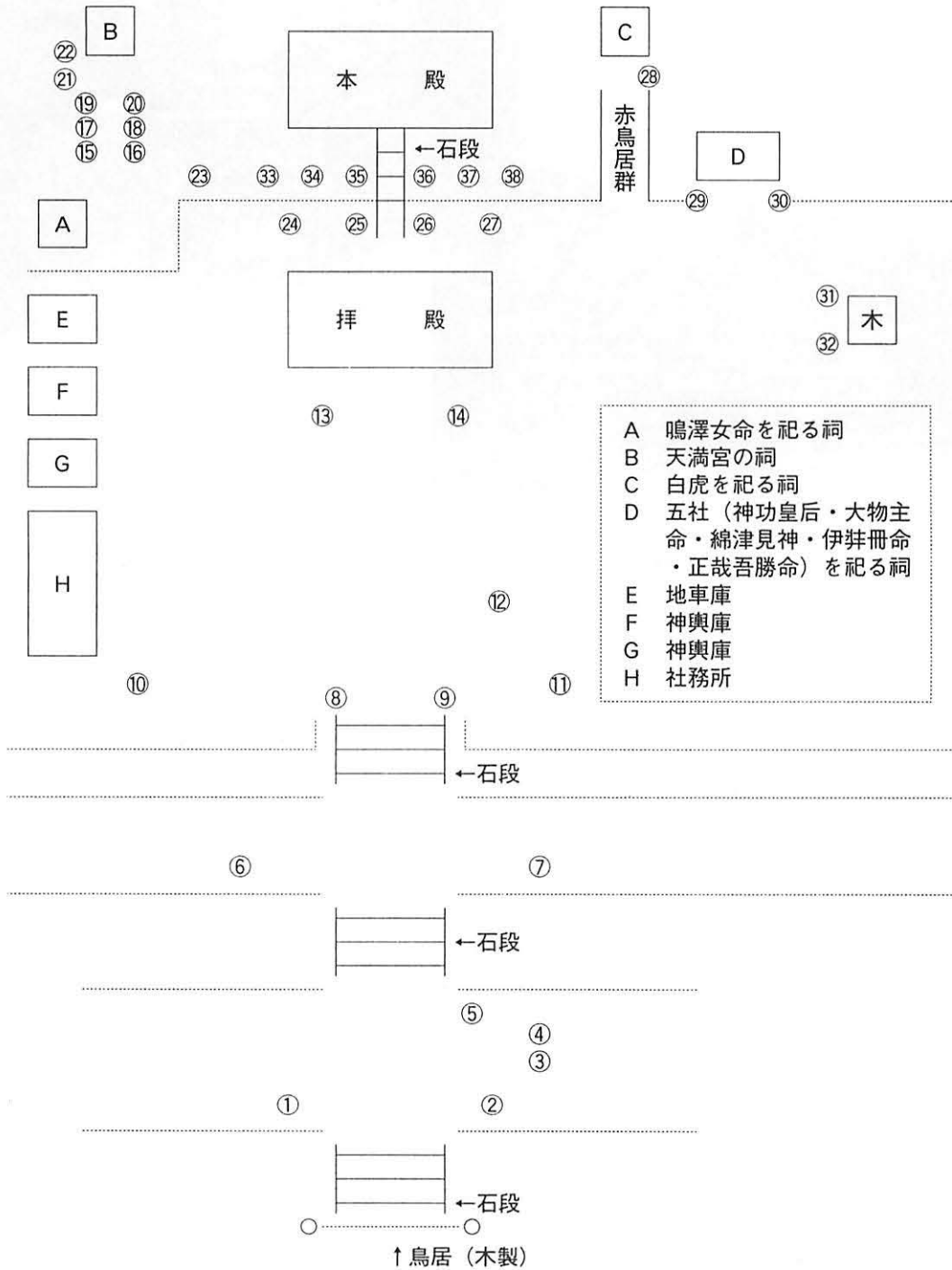
稲荷神社

所が明治末までお旅所となる。

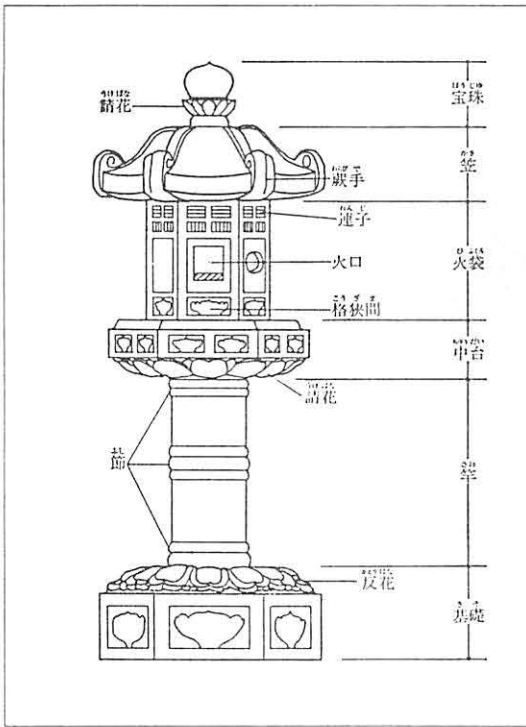
稲荷神社は、近世には本庄九ヶ村（森・深江・青木・北畑・田辺・小路・中野・三条・津知）の総社であった。明治五年に氏子が分離し、森・深江・青木の三ヶ村だけが氏子となった。明治六年に村社に列せられている。「神社明細帳」によると、明治四十二年に森村の天満神社を合祀し、同四十四年に同村の山神社を合祀している。「兵庫県神社誌」には、境内千四百五坪あり、营造物として、桧皮葺入母屋造九坪二尺の本殿、瓦葺入母屋造二十四坪の拜殿が記述されている。また、神社の南方、森南町三丁目の国道二号線すぐ北側に、高さ五・八メートルの巨大な赤鳥居が建っている。これは昭和二年八月に建てられた物で、今では高層ビルの陰になっている。しかし、昭和二十年五月十一日の空襲時には、青木にあった川西航空機甲南製作所が米軍の攻撃目標になり、五月五日に撃墜された米軍飛行士が持っていた航空写真に十一日の爆撃計画の付近の目印として、この赤鳥居が記入されていた。この赤鳥居が建っている阪神電車深江駅から稲荷神社まで通じる南北の道路は、通称、「稲荷筋」と呼ばれ、例祭の日には店が立ち並び、賑わった。現在五月三日と四日に卯の葉まつりと称する例祭が行なわれ、ダンジリが曳き回され、人々が熱中している。

### 三、石灯籠について

境内の石造遺物の内、大半が石灯籠であるが、次に石灯籠について簡単に記したい。石灯籠は、神社で最も普遍的に見られる石造遺物である。下より、基礎・竿・中台・火袋・笠・宝珠（請花を伴う）で構成され、火袋には灯明がともせる構造になっている。しかし、これも一般的な形であって、極端に言うると、灯明がともせる火袋だけがあれば石灯籠の機能は果たせるのである。その起源は中国にあ



稻荷神社境内石造遺物配置図



石 灯 籠

り、本来は仏前への献灯用であったが、平安時代の頃から神社でも建てられるようになり、当初正面に一基建てられていたものが、室町時代頃に左右一対、二基建てられるようになった。桃山時代以降に茶道が確立すると、庭園の鑑賞用にも用いられ、織部灯籠や雪見灯籠などの変形した石灯籠も現れるようになった。江戸時代になると、常夜灯として建てられるようになり、神社の参道や入り口にも置かれた。また、道標として路傍にも建てられるようになった。形状も、竿の表面が撥形になった神前（宮前）型と呼ばれる物が多く作られるようになった。稲荷神社の境内もこの神前型が多く見られる。火袋の平面形により、四角・六角・八角灯籠と分類される。構造が複雑なものと、その形状から倒壊しやすく、破損や補修が目につく。先にも書いたように、神社への奉納された石造遺物の中では数が多い、時の有力者・権力者の名前が刻まれている物もよく見られる。

#### 四、境内の石造遺物

次に境内の石造遺物について紹介していきたい。番号は配置図の番号に対応する。材質は特に明記しない限り花崗岩で、遺物に刻まれた銘文も特に明記しない限りは縦書きである。

##### ① 石灯籠

南側にある鳥居をくぐると石段があり、上に行くと左右に石灯籠が見られる。西側にあるのが①で、現高は百八センチ。完形で、請花は省略され、正面が四角形になっている。特に明記しない限り、この形状の物が多い。基礎は一段になっているが、下半分が土に埋もれている。竿は神前型になっている。正面は東向きで、「永代常夜燈」としっかりとした字で陰刻され、背面に「七月吉日」、北面には「宝曆二壬申年」と陰刻されている。宝曆二年は一七五二年で江戸時代中期の建立である。火袋は四角型で、北面と南面は四角い火口になっており、東面は半円形の、西面には円形の窓が見られる。

##### ② 石灯籠

①と石段をはさんで東側にある。形状はほぼ同じであるが、一対の物ではない。総高は百九十五センチ。①②とも笠は軒が薄く、軒下は水平で、軒上は軒端で上方に強く反転している。隅降棟は波形の曲線になっており、照り起りが見られる。竿は平面が撥形になっており、正面が西向きで、「常夜燈」と陰刻され、背面に「願主神田小右エ門」、南面に「安政四巳年三月吉辰」とそれぞれ陰刻されている。安政四年は一八五七年で、江戸時代末期の作である。吉辰は吉日と同じ意味の語句で、石造遺物ではしばしば使われている。基礎は二段から成り、下段の東面に「石工／文右エ門／作」と陰刻されている。文右エ門がどこの石工かは不明であるが、地元の（御影・住吉）石工と思われる。火袋は四角型で、南面と北面は四角い火口になっており、東面は半円形の、西面には円形の窓が見られる。

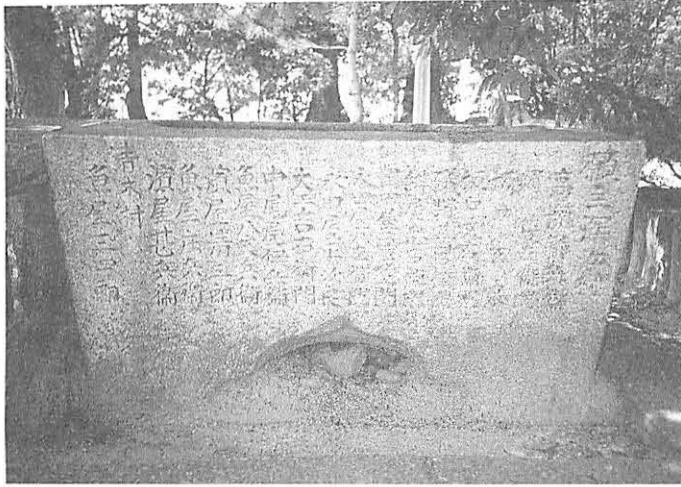
## ③ 井戸枠

①②の東側にある。上部には分厚いコンクリートの蓋があり、中は見られない。井桁いげだに組まれており、西を正面として、幅百八・五センチ、高さ四十九センチ、奥行百十センチを測る。各面とも素面である。

## ④ 水盤

③と南北に並んで所在する。

水盤も社寺に普遍的に見られる石造遺物のひとつである。水鉢・手洗石・水船などいろいろな呼び名がある。水盤は水を入れる容器のことであるが、用途によって分類すると、浴用・手水用・貯水用



④ 水盤—文政5年(1822)

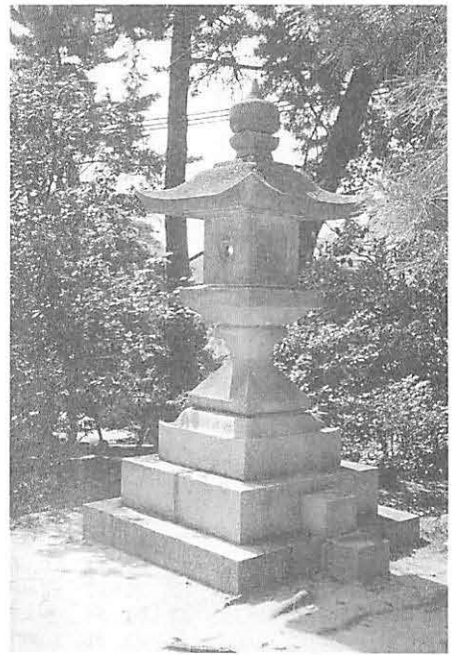
の三種類に分かれる。共通しているのは、水を貯めるための貯水部が穿たれている点である。しかし、構造が比較的単純なため、時代別の変化を見ることは難しい。一般に目にするのは手水用で、社寺に参詣した時に、口をすすいだり手を洗ったりして体を清めてからお参りするのための物である。どの社寺でも一般に見られ、正面に、浄水・盥水・清浄水などの名称が刻まれ、側面や背面に紀年銘・奉納者名などが刻まれることが多い。江戸時代になると、庭園に観賞用として置かれる物も出てくる。

④は正面が西向きで、上端の幅百三十六センチ、高さ六十五センチ、上端の奥行六十三センチを測る。上部に楕円形の水穴を穿ち、内法は九十九×三十九センチを測る。水穴の縁は水盤上部の面より盛り上がっている。正面に右より横書きで「奉納」と浅く広く陰刻され、北面に「文政五年六月吉日」と陰刻されている。文政五年は一八二二年で、江戸時代後期の作である。吉祥日は吉日と同意語である。背面には、「願主深江村／高瀬新兵衛／岡茂左衛門／坂口玄泉／坂口文右衛門／磯野甚右衛門／紺屋忠右衛門／岡田屋幸左衛門／永田屋八左衛門／永田屋半次良／大工吉右衛門／中尾屋伊兵衛／魚屋八良兵衛／濱屋清三郎／魚屋庄兵衛／濱屋甚兵衛／木村／魚屋三四郎」と一面いっぱい陰刻されている。魚屋や濱屋など当時の漁業が盛んであった様子が偲ばれる。正面には、幅百二十八センチ、高さ三十八センチ、奥行十二・五センチを測る板状の石材が立てられている。

## ⑤ 石標

①④が所在する平坦面の、中央北側にある石段のすぐ東脇に建っている。幅二十四センチ、高さ百十八センチ、奥行五十五センチを測る四角柱で、正面に「公債／金五拾貫 鳥居久吉／同壽枝」（公債は右より横書き）、向かって右面に「皇國擁護基金献納ノ大坂」、





⑥ 石灯笼——明治43年(1910)

左面に「百箇庶之外第拾五號」と細い字で陰刻されている。

### ⑥ 石灯笼

⑤の横の石段を上がると、左右に一对の石灯笼がある。竿は神前型の物で、撥形のくびれ方は①②より激しい。総高は二百七十七センチで、稲荷神社の境内の石造遺物では一番高い物である。宝珠の請花の上部は波形に裝飾されている。基礎は三段から成り、中段の北面に「武庫郡本庄村之内／深江村／岡田正藏」とかなりくずした字で陰刻されている。南面が正面で、竿の正面に「猷燈」、背面に「明治四十三年三月三日」と、これもくずした字で陰刻されている。火袋は四角型で、南面と北面に四角い火口があり、東面に円形、西面に三日月形の窓が見られる。笠は軒口が斜めに切られ、軒端が大きく反りかえっている。

### ⑦ 石灯笼

⑥と一对。⑥と比べて、火袋の東面と西面が入れ替わっている。

### ⑧ 玉垣

本殿のある平坦地へ上る石段を上ると、左右に玉垣が見られ、そ

れぞれ奇進者の名前が陰刻されている。石段の最上部の脇にある物は、石段の耳石の役割も果たしており、一回り大きな物になっている。頭部が角錐の四角柱で、流紋岩製。石段西側の⑧は、北面に「免原郡脇濱浦／長濱清五郎」と陰刻されている。幅二十五・五センチ、高さ百八センチ、奥行二十六センチを測る。

### ⑨ 玉垣

石段をはさんで⑧の東側にある。同型式の物で、幅二十七センチ、高さ百七センチ、奥行二十六センチを測る。北面に「深江村／岡田正藏」、西面に「猷築 明治十八年／西第五月生日」と陰刻されている。

### ⑩ 石灯笼

⑧のすぐ西側にある。総高は二百四十七センチで、宝珠に四角形の請花を伴う。基礎は三段から成り、中段の南面に「小西屋／治右衛門／大佛屋／六兵衛」と奇進者の名前が陰刻されている。基礎の北面には、火袋に火を入れる時に上がる石段が据え付けられている。竿は神前型で形は良い。南面が正面で、「常夜燈」、東面に「天明六年／丙午九月吉日」と陰刻されている。天明六年は一七八六年で、江戸時代後期の作。火袋は後補された物で真新しく、四角型で南面と北面は四角い火口になっており、木枠の窓が付けられている。東面は半円形、西面は円形の窓になっている。

### ⑪ 石灯笼

⑩と一对の物と思われるが、樹木に被われていて細部は不明である。

### ⑫ 水盤

自然石の上面に水穴が穿たれていて、内法は九十四×三十六センチを測る。高さは六十五センチ。背面は樹木に遮られて銘文の有無は不明である。正面は素面である。



⑬ 石灯笼——文久元年（1861）

## ⑬ 石灯笼

拜殿の前に一対で建っている。切石積の台石上に三段の基礎を築き、総高は二百六十六・五センチを測る。竿は四角型で、上部の四隅は少し起りが見られ、下方は若干裾広がりになっている。正面に上部が花頭型の窪みをつけ、内部に「獻燈」と陰刻されている。背面は「文久元／辛酉弥生」と江戸時代末期（一八六一）の年号が陰刻されている。また基礎の上段の正面に、右から横書きで「青木」、中段の正面も同じく右から横書きで「惣講中」と陰刻されている。背面には、火口に火を入れる時に上る石段が据え付けられている。火袋は四角型で、四方共四角い火口になっており、木枠の窓が付けられている。笠の四隅は強く反転している。宝珠には請花が伴っており、その上部は波形の装飾が施されている。

## ⑭ 石灯笼

⑬と一対。

## ⑮ 石灯笼

本殿は拜殿より一段高い所にあり、その西側に二つの祠があり、それぞれ、鳴澤女命と天満宮を祀っている。天満宮の前に四基の石

灯笼と二基の狛犬が建っている。⑮は⑯と共に最前列に位置している石灯笼である。宝珠・請花が亡失しており、現高は百五十四センチ。基礎は二段から成り、上段の正面に横書きで右から「野間門人中」と陰刻されている。野間門人は、本庄墓地内に墓碑がある野間本造を慕う門下の人々のことであろう。野間本造については『武庫郡誌』によると「天保七年（一八三六）頃、播州小野よりやってきて、深江村で子弟に漢籍・珠算・書道を教えた。学徳が優れていたため、その徳を慕って教えを受ける人が多かった。慶応年間（一八六五～一八六七）に病死し、弟子たちが深江村の墓地に碑を立てた」と記述されている。背面には「發起人／岡田正蔵／野村平兵衛」とかなりくずした字で陰刻されている。竿は神前型の物で、正面に「獻燈」、背面に「明治二十七年七月」と陰刻されている。火袋は四角型で、南面と北面に四角い火口があり、東面に円形、西面に三日月形の窓がある。

## ⑯ 石灯笼

⑮と一対。宝珠と四角型の請花もあり、完形で総高は百七十八センチ。

## ⑰ 石灯笼

一段の基礎の上にある竿は四角型で、神前型ではない四角柱状の物。南面が正面で、「天満宮」、東面「願主 宮本中／敬白」と陰刻されている。西面は風化でほとんど文字は読みとれないが、⑯の東面と同じ内容の銘文が陰刻されているものと思われる。総高は百三十五センチ。火袋も四角型で、南面と北面に四角い火口があり、東面に円形、西面に半円形の窓がある。宝珠には請花を伴い、四角型である。

## ⑱ 石灯笼

⑰と一対であるが、笠などに破損が目立つ。竿の正面に「天満宮」、



東面に「寛延三庚午年／九月十五日」、西面に「願主宮本住某／敬白」とそれぞれ陰刻されている。寛延三年は一七五〇年で江戸中期の作。

### ⑱ 狛 犬

高さ六十九センチの台石上に置かれている。狛犬は砂岩製で、下部は厚さ九センチの敷石になっており、狛犬そのもの高さは五十五センチを測る。大阪狛犬の型式で、敷石の正面に「獻」、背面に右から横書きで「明治四十四年□月」と陰刻されている。

狛犬も、どこの神社でもよく見かけられる石造遺物で、参道入口や神社に置かれていることが多い。一方が口を開き、一方が閉じるという阿吽あうんの形をとっている。中国の漢の時代に、廟所けいじょの前方に守護神的役割として石彫りの獅子が置かれたことが始まりという。狛犬は唐獅子とも呼ばれ、異国の動物である。日本で見られるようになったのは平安時代からで、寺院にはほとんど置かれず、もっぱら神社に置かれた。古くは屋内に置かれた木製が多く、江戸時代以後に、屋外に置かれた石造製が数多く作られるようになった。狛犬はその形状によって、大阪（浪花）狛犬・出雲狛犬・尾道狛犬などと呼ばれている。

### ⑳ 狛 犬

⑱と一対。敷石の正面に「奉」、背面に右から横書きで「發起人岡田正蔵」と陰刻されている。

### ㉑ 石 祠

天満宮の祠の斜め前方にある。幅三十八センチ、高さ三十七センチの基礎の上に室部があり、正面は扉がなく、中には何も祀られていない。屋根は頭部に水平棟があり、幅十九センチ、高さ六センチを測る。屋根全体の幅は四十七センチ、高さ三十一センチを測る。隅降棟は軒に向かってゆるやかな照り曲線を示している。銘文は見られ

ない。何を祀っていたかは不明であるが、山の神を祀っていた祠であるかも知れない。

### ㉒ 自然石

⑲の石祠の横にある。高さ六十四センチ、幅五十七センチを測る。自然石の表面に無数の窪みが見られる。自然に付いた物か人為的な物かはわからない。祀られている物であるが、この石材が何であるかは、神社の人もご存知ない。

### ㉓ 石 灯 籠

本殿の西南隅に建つ。繁みの中にあり、外からはほとんど存在は



⑲石灯籠——元禄6年（1693）左は竿の銘文の拓本

わからない。上部が繰形座になっている基礎の上に竿があり、四角柱で角には面取りがされている。南面が正面で、「奉献上 石灯笼」、背面に「元禄六癸酉年二月八日」、東面に「岩井嘉左衛門」、西面の下方に「岩井重兵衛」と陰刻されている。元禄六年は一六九三年で、江戸時代中期の作である。稲荷神社境内の石造遺物の中で最も古い紀年銘を刻んでいる。火袋は四角型で、南北面に四角い火口があり、西面に半円、東面に円形の窓がある。過去に倒壊したのか、各部の継ぎ目がセメントで補修されている。総高は百六十三センチで、竿の高さは五十八センチを測る。

#### ②4 石灯笼

本殿前の一段低い所に建つ。総高は二百七十センチ。基礎は上部に蓮弁が見られ、中央に複弁を意識した単弁一葉、隅にも同じ形の単弁を刻出している。竿は円柱で、長さは八十一センチを測る。中央に二条線の節が見られる。南側の正面には、「永代常夜燈」、背面に「六月吉祥日」、東面に「願主宮本次郎兵衛」、西面に「延享元年歳」と陰刻されている。歳は年と同じで、延享元年は一七四四年で江戸中期の作。石の表面は風化で荒くなっており、文字は読みとりにくくなっている。中台下方には蓮弁が見られ、中央に単弁一葉、隅にも単弁が刻出されている。火袋は四角型で、南北面に四角い火口があり、西面に半円形、東面に円形の窓が見られる。笠は四隅に炭手と呼ばれる巻き込み状の物が見られる。

#### ②5 狛犬

本殿前にあり、高さ九十二センチの台石上についでいる。台石には正面に「獻」、背面に「大正十三年二月／深江／岡田正蔵／全いく」、西面に「大阪八軒家／石匠川島三平」と陰刻されている。神戸市東灘区深江本町三丁目所在の大日靈女神社の境内にも、同じ寄進者、石工による狛犬がこれより一ヶ月前に建てられていた（本誌

二十号参照）。狛犬は大阪型で、高さ九十センチを測る。大日靈女神社の物とちがいが、花崗岩製である。

#### ②6 狛犬

②5と一对で、台石正面には「奉」と、くずした字で陰刻されている。

#### ②7 石灯笼

本殿前に建つ。総高は二百二十三センチで、一見②4と一对の物のように見えるが、細部にわたって違いがあり、作成された年代も違っている。こちらの方が古いので、②4はこれと一对になるように類似形で作られたものであろう。基礎の上部に蓮弁が見られ、隅に単弁が刻出され、中央にも押しつぶされた間弁状の物が見られる。竿は円柱で、長さは八十四センチを測る。中央に二条線の節が見られ、正面に「永代常夜燈」、東面に「享保十三戊申年」、西面に「卯月吉祥日 宮本願主四良左衛門」と陰刻されている。享保十三年は一七二八年で、江戸時代中期の作。中台の下部にも蓮弁が見られ、中央に複弁一葉、その左右に間弁を配し、隅にも複弁を刻出している。



②7石灯笼——享保13年 (1728)



②⑧石灯笼 — 宝永7年(1710)

火袋は四角型で、南北面に四角い火口があり、東面に半円形、西面に円形の窓が見られる。笠の四隅に蕨手が見られ、②④より大きい巻き込み状になっている。

②⑨ 石灯笼

本殿東の五社を祀る祠の前に建つ。高さ十八センチの台石上に立ち、総高百九十七センチ。基礎には、側面に花頭形の格狭間を意識した輪郭が各面に見られる。上部には蓮弁が見られ、中央に単弁一葉、左右に間弁を配し、隅にも単弁を刻出している。竿は神前型で、各面の左右両端に外より一センチ入ったところに一本の筋が縁に沿って陰刻されている。正面に「永代常夜燈」、東面に「宝永七庚寅年卯月八日」、西面に「施主宮本神田又左衛門」と陰刻されている。宝永七年は一七一〇年で、江戸時代中期の作。中台に蓮弁は見られないが、側面には桐や菊が陰刻されている。火袋は四角型で、南北面に四角い火口があり、東面は半円形、西面は円形の窓になっている。笠の隅降棟は照り起りが見られる。

②⑨ 石灯笼

②⑧と一对。竿の西面には「施主大坂紙屋又兵衛」と陰刻され、それ以外は②⑧と同じ型式である。

③⑩ 石灯笼

本殿東のやや奥に白狐を祀る祠がある。祠の向かって右前に一基の石灯笼が建っている。総高は百五十一センチを測る。竿は四角柱で、正面に「献燈」、背面に「願主/柏屋弥兵衛」、東面に「于時文久二年/壬戌初夏吉日」と草書体で陰刻されている。文久二年は一八六二年で、江戸時代末期の作。彫りは浅く、文字は読みとりにくい。火袋は四角型で、南北面に四角い火口が見られ、西面に円形、東面に三日月形の窓が見られる。

③⑪ 石灯笼

本殿東に一本の木が祀られ、その前に二基の石灯笼が建つ。基礎はほとんど土中に埋もれている。竿は細長く、不安定な印象を与える石灯笼である。竿は四角柱で、正面に「献燈」、背面に「皇紀二千六百二年五月/朝日仁朗」と陰刻されている。火袋は四角型で、東面と西面に四角い火口があり、南面は円形、北面は半円形の窓が見られる。火袋の上は、切妻の屋根形になっており、勾配は二段になっている。頭部には水平棟が見られる。皇紀二千六百二年は、昭和十七年にあたる。現高は百三十七センチ。

③⑫ 石灯笼

③⑪と一对。竿の背面に「皇紀二千六百二年五月/小田切儀七」と陰刻されている。

③⑬ 石灯笼

本殿前の樹木の繁みの中にあり、各部の計測はできないが、竿は円柱で、中央に節がある。火袋は六角型で、中台の下に請花が見られる。銘文等は不明。

